

# 『羅通掃北』に見る英雄物語の「創作」

柴 崎 公美子

## 一 はじめに

隋唐ものの歴史小説の生成発展過程を見ると、まず明後期から末期に、史書に依拠し比較的歴史に忠実な内容を持つ「歴史演義小説」が出現する。そしてその後清代に入ると、特定の英雄的人物の人間離れた活躍を語る荒唐無稽な「英雄伝奇小説」が刊行される。印刷技術の発展普及や経済力の増大を背景に、一般大衆の出版に対する要求が変化し、娯楽性の高い書物が求められるようになったことがその理由として考えられる<sup>(1)</sup>。

「英雄伝奇小説」の特徴は、超人的英雄の荒唐無稽な活躍を描くというほかに、その活躍を描く上で同一の物語要素を何度も繰り返し用いるという点もある。この点に関しては、大塚秀高氏がそうした物語要素を「物語素」と称し、それが隋唐歴史小説に属する「多くの物語小説、とりわけいわゆる家将小説とその周辺の戯曲」に目

立つ点を指摘されている<sup>(2)</sup>。「家将小説」とは特定の武家の数世代に互る戦記を描く小説のことを指し、隋唐ものの歴史小説の中では、『説唐後伝』、『説唐三伝』、『武則天改唐演義』、『粉粧楼全伝』などがこれにあたる。

家将小説において作品ごとに同じような内容が繰り返し語られるのは単なる「同工異曲」にすぎず、文芸作品として評価するに値しないというのがこれまでの一般的な見方であった。段春旭氏は著作『中国古代長編小説統書研究』<sup>(3)</sup>の第五章「歴史小説的統書」において、先に挙げた四つの隋唐家将小説を歴史演義小説『説唐演義全伝』<sup>(4)</sup>の「統書」と規定して論じる。しかしその評価については従来のものを突破しきれていない。例えば『説唐後伝』（以下「後伝」と略称する）の第一回から第十四回（テキストによっては第一六回まで）に収められる羅通という英雄の物語についての論を挙げる。羅通は、史実における羅士信をモデルとする將軍羅成の息子とされる架空の人物である。唐太宗の北伐に従って功績を挙げる内容なので、その

物語が「羅通掃北」と称されることもあり、羅家累代の活躍を描く「羅家將小説」の一つとして位置付けられる。この小説に対して段氏は、「作者は完全に《説唐全伝》の父親世代の描写を模倣しているため、これら若い英雄たちは全く自分の魂も血肉も持つておらず、ただの父親世代のコピーに過ぎない。『羅通掃北』の部分の芸術描写は粗雑で簡単であり、創造性がなく、よって出来が良いものではない。」<sup>(5)</sup>と評するに留まる。また、薛仁貴を祖とする薛家將小説である『説唐三伝』（以下『三伝』と略称する）については、家將小説がパターン化された叙事スタイルを有していることを指摘した上で、作品のイメージが形作られる際に一致した素材と創作手法が採用され、その結果小説史上に似たような性格を持つ人物イメージが多く現れるが、そのイメージは作者の理想の英雄像が反映されていると述べる。<sup>(6)</sup>

この段氏の議論に疑問を感じるのは、「統書」の考え方とそのままかたである。「統書」とは、特定の作品の個別の価値や認識を前提として、その故事群を再生産したものと規定することができる。『後伝』および『三伝』は、唐代を舞台にしておりかつその物語内容が『説唐全伝』（以下『全伝』と略称する）に接続はしているが、『全伝』を再生産したものではない。単純に物語内容の時間軸が接続しているというだけで、『全伝』は歴史演義小説、『後伝』と『三伝』は家將小説というまったく異なったジャンルに属する作品なのだから、その素材と創作手法は双方別物であって、混同して成り立

つものではないし、並べて評価できるものでもない。評価すべきは、それぞれのジャンルに即した作品成立のありようなのである。とすれば、『後伝』の一部である「掃北」の創作に関しては、『全伝』と比較して模倣であり創造性がないと切り捨ててはならず、むしろ『三伝』と比較して、「一致した素材と創作手法が採用され、その結果小説史上に似たような性格を持つ人物イメージが多く現れる」とことが「掃北」にもあるという前提で考えるべきではないだろうか。

以上のことを踏まえた上で、本論は「掃北」を『全伝』の「統書」ではなく、家將小説ジャンルの一作品として捉え、家將小説において共有される物語の要素（本論では大塚氏の語を借りて「物語素」と称することにする）<sup>(7)</sup>がどのように作品内に用いられているかを検討して、その作品成立のありようから捉え直したい。ここで「掃北」を取り上げるのは、武將としての羅通の活躍を物語る先行作品がなく、家將小説の「物語素」及び来源と、羅通そのものの物語とを明確に切り分けることができ、「掃北」の作品としての「個性」を明らかにしやすいと考えたからである。

ところで、大塚氏は「家將小説」について「これらの作品群を論ずる際には通俗小説のみならず、主人公を同じくし、ストーリーの大半もしくは一部を同じくする芸能や演劇に属する作品をも含めて論ずることが肝要である。」と述べられており、筆者もこれに同意する。したがって、以降はメディアとしての小説そのものを指す時には「家將小説」とし、芸能や演劇といった通俗文芸作品を含めた

場合は「家将物語」と称することにしたい。

## 二 「羅通掃北」小説のテキストと

### 物語の内容について

『羅通掃北』（以下「掃北」と略称する）は前述したように『説唐後伝』（以下『後伝』と略称する）の中に所収される唐太宗北伐のエピソード部分を説明する時に用いられる名称である。この部分を上下二巻に分け『説唐小英雄伝』と称するテキストもある。乾隆四十八年刊行の「観文書屋本」を影印出版した『古本小説集成』<sup>(8)</sup>の徐朔方による前言では以下のように述べる。

《羅通掃北》和《説唐小英雄傳》是同一小説的兩種不同版本、前者目錄載十四回、正文實為十五回、後者十六回。前者將後者第二、三回及第十、十一兩回各合成一回、後者將第十六回題為「受聖恩康王復位、平北番太宗回朝」、使全書顯得更有獨立性。其餘回目兩書一致、偶有一二文字差異。前者將後者中的四回合成兩回後、却以第十四、十五回填補後者第十六回的空缺。

《羅通掃北》と《説唐小英雄傳》は同じ小説の二種の異なる版本で、前者は目録には十四回あるが本文は実際は十五回であり、後者は十六回である。前者は後者の第二回と第三回および第十回と第十一回をそれぞれ一回に合成している。後者は第十

六回を「受聖恩康王復位、平北番太宗回朝」と題しており、この本全体の独立性を明らかにしている。その他の回目は両書とも一致しており、一二文字の差異があるに過ぎない。前者は後者の中の四回を二回に合成した後、第十四回と第十五回で後者の第十六回の欠落を補填している。）

以上の言からすれば、『説唐小英雄伝』（以下『小英雄伝』と略称する）は全十六回で独立した体裁を成しており、「掃北」はそのテキストの内容を合成して実質十五回にしたものということになる。筆者は東京大学文学部図書館に所蔵される『小英雄伝』を所収する天徳堂梓本『後伝』を閲覧し、観文書屋本と比較して、徐朔方の言には議論の余地があると判断した。しかし、『小英雄伝』および「掃北」という二種類の版本における差異は本論の内容には影響しないものだったので、後日別の形で論じる機会を持つこととし、本論では参照しやすい観文書屋本を底本に用いて論述を進めてゆく。つづいて、以下に「掃北」のあらすじを述べる。今後の論述に便利ないように数回の内容を展開に即してまとめ、観文書屋本の対応する回数を記す。

#### 第一回…

唐太宗の即位後しばらく平和が続いていたが、北番赤壁宝康王から戦書がもたらされ、秦叔宝を元帥とした太宗の北伐が決

まる。唐軍は白良関まで進軍し、守將劉国貞と交戦する。

## 第二回～第三回…

尉遲敬徳に敗れた国貞に代わり、その息子である宝林が出陣する。唐の名將尉遲敬徳と引き分けたことを宝林が母梅氏に語ると、梅氏は敬徳はかつての夫であり、宝林とは生き別れの実の父であることを明かす。宝林は戦場で敬徳に見え真実を打ち明け、国貞を捉えて唐に降る。梅氏に会いに行つた尉遲父子であつたが、梅氏は節を全うするために自死する。唐軍は続いて銀靈川を攻略し、野馬川へ進軍する。

## 第四回～第五回…

唐軍は野馬川、黄龍嶺を攻略し、木陽城へ入城するが、北番の屠封丞相の娘で康王の養女である屠炉公主の空城計によつて場内に閉じ込められる。唐軍の軍師徐茂公は程咬金を遣わして長安へ救援を求めに行かせる。

## 第六回～第十回…

長安へ着いた程咬金は救援軍の元帥を決めるため比武を催し、將軍羅成の息子羅通が元帥権を得る。羅通の母親竇氏は羅通の父と祖父は国に忠義を尽くしながら敵の為に悲惨な死を遂げたと涙ながらに訴え息子を行かせまいとする。しかし羅通は出陣し、あろうことか九歳の弟羅仁までもが兄の後を追つて長安を出る。羅通は進軍の最中父と祖父が唐の將軍蘇定方によつて殺されたことを知り、定方の息子達を迫害する。兄に追いついた

羅仁は兄が手こずつた敵鉄雷八宝を倒すが、屠炉公主によつて殺される。

## 第十一回～第十三回…

屠炉公主が弟を殺したことに激怒する羅通であつたが、その屠炉公主は羅通に一目惚れし婚姻を迫る。羅通は北番の投降と引き換えにその求婚を受け入れる。羅通は木陽城へ到達するが、息子たちを迫害されたことを知つた蘇定方が羅通を死なせようと四方の門を転戦させる。屠炉公主が北番元帥左車輪を倒したことで木陽城の囲みはとかれ、北番は唐への投降を決める。蘇定方は尉遲敬徳に捕らえられ、太宗の許しを得た羅通は定方を殺して仇討ちを果たす。

## 第十四回～第十五回…

羅通は婚礼の日の夜屠炉公主を面罵し、自刃に追い込む。その結果に激怒した太宗は羅通から職位を剥奪し、今後の婚姻も許さないことにする。太宗は康王を復位させて長安に帰還する。徐茂公は再び外国に反乱が起こることを予言し、太宗は不吉な夢を見る。

この後徐茂公の予言通り高麗の蓋蘇文から戦書が送りつけられて太宗の征東が始まり、物語の主役は羅通から薛仁貴へ移ることになる。

羅通は前項で述べたように架空の人物であるが、その存在自体は

明代に刊行された『大唐秦王詞話』<sup>(10)</sup>で確認できる。第五十回「淤泥河羅成死節、長安城秦府興兵」において劉黑闥の軍と交戦した羅成は、当時まだ黒闥の部下であった蘇定方の計略によって淤泥河と称される泥の浅瀬に追い込まれ大量の矢を射かけられて死ぬ。羅成は死後その魂を夜半若妻の夢に現わし、死亡の経緯とその恨みをとうとうと語る。その際若妻が3歳の子を抱いていたことが語られる。そして第五十一回「再顯魂羅成雪恨、破饒州黒闥伏誅」で当時秦王であった李世民が奏上した一文「可憐羅成爭功陣亡、有一子羅通。年方三歳、係功臣之後、月給俸米恩養。（羅成はあわれにも功を争つて陣没しました。一子羅通はようやく三歳です。功臣の後をつなげる者ですので、毎月俸禄を与えて恩養下さいますよう）」によってその名が羅通であることが明かされる。その他羅通の名が見えるのは『説唐全伝』第六十二回であり、やはり羅成の三歳の遺児として登場する。

羅成が蘇定方によって殺され、3歳の息子羅通が遺されたことは通俗文芸上では比較的早い段階で生まれていた設定であり、「掃北」がその設定を受け継いで構成されていることは確かである。そしてその「来源」とも言える内容以外に「掃北」の構成に利用されているのが家将物語によく見られる「物語素」である。次の項では「掃北」にどういった「物語素」が利用されているのかを他の家将物語で用いられている例を合わせて確認することとする。

### 三 家将物語の「物語素」について

「はじめに」の項で述べたように、家将物語とは特定の武家の数世代に互る戦記物語を指す。五代末の北漢から北宋にかけて実在した楊一族についての「楊家将」物語が最も有名で代表的なものと言ってよく、『南北両宋志伝』の後半にあたる『北宋志伝』ならびに『楊家府世代忠勇演義志伝』（以下『楊家府』と略称する）という長編の小説がある。この小説に登場する楊業と息子の楊延昭の事跡は北宋中期にはすでに逸話化されていたと言ひ、小説は、そうした父子二代の逸話が、時代を経て孫、曾孫に至るまでの物語に拡大増幅していったものを集成して成立した。<sup>(11)</sup>楊業の孫で延昭の息子楊文広の「父母」として「楊宗保」と「穆桂英」という架空の人物たちが設定され、延昭と文広との間にもう一世代が創出されたのもそうした増幅の一つであった。これらの小説には明万暦年間の刊本が存在するが、<sup>(12)</sup>万暦年間と言えば薛家将の物語にも関係の深い時期で、仁貴の征東を物語る『白袍記』、その息子の薛丁山が征西する『金貂記』といった長編の伝奇テキストも万暦年間のものが残る。<sup>(13)</sup>薛丁山は物語における仁貴の息子で、実在はしない。

こうした架空の世代の創出は、家将物語形成のパターンの一つと言つてよい。例えば宋代の実在の武将狄青は寒門出身であったが、その事跡が小説となった『万花楼演義』では太原府総兵を務める狄



広という父親が設定され、名門の武家出身ということになった。『説呼全伝』（以下『説呼』と略称する）における呼家将は、呼延贊とその息子呼延必顯は実在するが、孫世代の守信、守用以降は架空の存在である。また、宋の太祖趙匡胤を主人公とする清代の小説『趙太祖三下南唐被困壽州城』（以下『三下南唐』と略称する）に登場する高家一族の武将のうち、高行周と息子懷徳までは史書に伝が立つが、懷徳の息子君保は物語上の人物である。<sup>(14)</sup>

羅通もまたそうした世代創出のパターンの踏襲によって生み出された存在であって、彼の父親が『全伝』に登場する武将羅成であるから「掃北」は『全伝』の続書であるという規定も成り立つのだが、裏を返せばそこにしか「続書」を規定する要素はない。一方、「掃北」が家将物語であることを規定する要素、すなわち家将物語の「物語素」は以下のように複数見いだすことができる。

#### （１）抵抗勢力に対する遠征

「掃北」が羅通の北伐を物語るように、家将物語において家將たちは皇帝にまつるわぬ抵抗勢力を征伐する。それは大抵の場合異民族あるいは反乱集団であり、家將たちは辺境へ遠征する。

楊家将物語、狄家将物語は時代背景をほぼ共有するので、双方共通する異民族と戦う。対遼北伐、西夏征伐および儂智高南伐がこれにあたる。楊延昭は実際に遼と戦っているが、景德元（1004）年には澶淵の盟が結ばれたことで北宋と遼とは不戦状態となってお

り、『北宋志伝』巻七のあたりからの遼との戦いは史実でない内容が展開されている。特に、八仙の呂洞賓と鍾離権が戦闘に介入して以降は「南天七十二陣」などといった呪術的な陣立てが行われたり、その陣を破るための天書を宗保が入手するなど荒唐無稽な展開となる。狄青は「遼」ならぬ「西遼」を征伐したという小説『五虎平西演義』があるが、辺境を守備し西夏に対抗したという事跡はあるものの「西遼征伐」は全くの虚構である。西夏に関しては楊宗保が征西を行ったとされているが、そもそも架空の人物なのでその事跡も史実ではない。儂智高を実際に平定したのは狄青であり、その事跡を描いた小説『五虎平南演義』（以下『平南』と略称する）があるが、楊文広が狄青と共に南伐で活躍したという物語は民間で古くから伝わっていたものとおぼしく、『楊家府』がこれを取り込んでいる。<sup>(15)</sup>

一方、体裁だけでも歴史演義小説に近づくことを目指した『北宋志伝』は虚構性の強いこの物語を本編から削除したという。

『三下南唐』はまだ趙匡胤が天下を統一する以前の時代の物語であって、その抵抗勢力は金陵に都を置く南唐であり、その南唐に親征するも敵兵によって寿州城に閉じ込められた趙匡胤を救うために高君保が出陣する。上述したように君保は架空の人物であるし、寿州に攻め込んだのは後周の世宗であって趙匡胤ではなく、かつ後周軍は南唐の援軍も退けて寿州を占領したので、君保の事跡もまた虚構のものである。

『説呼』ではやや状況が異なり、征伐するのではなく丞相龐集の

迫害から逃れた呼延守勇が救援を求めて新唐国へ逃れる。

こうして見ると、一部を除いて抵抗勢力への遠征はほぼ虚構であることがわかる。また、遠征する人物からして架空の人物であることも確認できる。薛家将物語の薛仁貴征東は史実に基づくが、その次世代の薛丁山征西は架空の人物による架空の遠征である。そして、その架空の遠征が行われる理由として比較的多く見られるのが、皇帝あるいはそれに準ずる存在が城に閉じ込められる「困城」である。

## (2) 困城

「掃北」では北番に親征した太宗が木陽城に閉じ込められることによって羅通が遠征する。これと同じパターンが見えるのが楊家将物語、薛家将物語、高家将物語である。狄家将の場合『平南』で狄青自身が敵の女将の魔術が生んだ大風によって陣営ごと高山に吹き上げられ進退極まる。

楊家将物語では皇帝が城に閉じ込められる事態が繰り返される。太宗は五台山に御幸した際、周囲の諫めも聞かず敵の牙城である幽州に遊びにでかけようとし、郊陽に駐留したところ遼軍によって城を包囲される。楊業父子達はその救援に向かい、三人の息子が陣没し五郎が五台山に逃れ四郎が遼に捕らえられるという悲運にみまわれる。また、真宗は遼の策略によって遼と境界を接する魏府へおびき出され、遼軍に包囲される。三関を離れた上に部下焦贊が謝金吾を殺害したことの罪によって追放状態となっていた六郎は、真宗か

らの赦免状が下されたことによって魏府へ救援に向かう。

薛家将物語では明成化説唱詞話『薛仁貴海跨征遼故事』（以下『故事』と略称する）において、唐太宗が高麗に親征し、敵元帥蓋蘇文によって三江越虎城に閉じ込められる。この時救援に來たのは、父秦叔宝の逝去を知らせると同時に援軍としてやってきた秦懷玉である。また、『金貂記』では李道宗に罪を着せられその懲罰として遼征伐の命を下された薛仁貴が敵將蘇保童によって鎖陽城に追い込まれ、息子薛丁山が救援に駆けつける。

『三下南唐』では太祖趙匡胤が南唐国主李景に挑発され出陣し、余鴻の法術によって高懷徳らと共に寿州城に閉じ込められる。母から父が敵軍に寝返ったと聞かされた高君保は、その事実を確かめるためと太祖を救うために母に黙って王府を抜け出し寿州へ向かう。

皇帝が城に閉じ込められる場合は大体において皇帝自身の油断であったり過失であったりする。そしてそのために重大な犠牲が出たり（楊家将）、誤解が生じたりする（高家将）。また、救援が悪役によって阻害される場合もある。高山に閉じ込められた狄青は劉慶と張忠に援軍を求めさせるが、途中で狄青に恨みを持つ孫振が二人を捕らえて狄青を滅ぼす陰謀に利用しようとする。鎖陽城から救援を求めに來た程咬金に対し、李道宗は老人と弱者によって構成された救援軍を与える。「困城」が家将物語に頻出するのは救援においていかに事件を起こさせるかという部分で物語に膨らみを与えることができるからだろう。そして、「困城」を救援にやってきた若武者

が遭遇するできごと」に、「殺四門」<sup>(16)</sup>がある。

### (3) 殺四門

「殺四門」とは、城に閉じ込められた味方を救援にやってきた武者が、そのまま入り入城することを許されず、東西南北四方の門を転戦し、その門を塞ぐ敵を全て倒すよう要求されることである。「掃北」の場合は羅通が蘇定方によって入城を阻害され、その要求に従って四門を転戦する。

この「殺四門」があるのは薛家将物語と高家将物語である。また、『蕩寇志』において呼延贊の子孫とされる呼延灼が殺四門するくだりがある。

薛家将物語では、『故事』において秦懷玉が三江越虎城で殺四門する。懷玉がやって来たのを知った太宗が門を開けさせようとするが、尉遲敬徳がその度ごとに「開けられませんが、別の門へ」と言うので、懷玉は四方の門を飛び回り賊軍を突破しなければならなかった。同じ情節は『後伝』の太宗征東部分にもある。『故事』ではなぜ敬徳が「開けられませんが」と言ったのかは判然としないが、『後伝』第三十九回では征東の元帥争いの際懷玉から二度殴られたことを恨みに思い、「今日この機会に乗じてそのかみの銀国公蘇定方のようにあやつに四門を転戦させよう、…」<sup>(17)</sup>と考えたことが記されている。殺四門は「掃北」と太宗征東部分で繰り返されるので、前出した羅通の殺四門を意識した記述になったのだろう。実は、蘇定

方が羅通に殺四門させたのも、尉遲敬徳と同じく恨みの感情によるものだった。このことについては次項で詳しく述べたい。

『三下南唐』で殺四門するのは女将である。寿州城に向かう途中で高君保は北漢の將軍劉乃の娘金定の招夫牌を倒し、結婚することになる。君保を追いかけて寿州城に入ろうとした金定は太祖から素性を疑われ、四方の門の敵を打ち倒すことで入城を許される。

### (4) 若武者に結婚を迫る敵方の女将

劉金定のように、敵方の出自でありながら若武者に惚れ込み求婚する女将は家将物語には枚挙に遑がない。『北宋志伝』や『楊家府』における穆桂英、寶錦姑、杜月英、鮑飛雲らはその中でも女将が男性武將を打ち負かした上で結婚を迫る「比武招親」によって楊家の武將と結ばれる<sup>(18)</sup>。『三伝』においても樊梨花、寶仙童といった女将が薛丁山を打ち負かしてその妻となる。そのパターンは女将の住む山寨や関所にやってきた若武者に勝負を挑み、これを負かして結婚を迫るというものと、戦場で若武者と出会い、戦闘して捕らえ結婚を要求するという二つに大きく分けられる。「掃北」では、北番の康王の養女という身分で登場した屠炉公主が戦場に現れた羅通の美貌に惹かれ、飛刀を突きつけながら結婚を迫るので、後者のパターンである。

そうした結婚の結果、家将物語には強力な能力を持つ女性の参入とその活躍による物語の広がりをもたらされることになる。さらに



皇帝に仕える武家が敵方の女将と結ばれることでその助力を得ると、敵方の抵抗が弱まり、やがて皇帝に恭順の姿勢を見せて大団円に収まるのだ。

こうして見てみると、家将物語の物語素には、困城、救援、殺四門、若武者に結婚を迫る敵方の女将、敵方の恭順と、それぞれの要素が連鎖しあう構造があることがわかる。これは、史書に基づき歴史を物語ろうとする歴史演義小説では決してあり得ない構造であり、特定の英雄あるいは英雄一族の活躍を描くことを目的とした家将物語を特徴付けている。「掃北」も明確に家将小説として成り立っている作品であることを改めて確認できた。

以上のことを確認した上で検討したいことは、家将物語である「掃北」が独自に語る部分である。例えば、物語素の(4)の敵方の女将の求婚については、楊家将物語にしる『三伝』にしる、男性武將に求婚した女将たちはみな夫たちを上回る活躍を見せ、そして驚くほど長生きする者もいるのだが、「掃北」の屠炉公主にはその未来は訪れなかった。彼女は婚礼のその日に、自ら命を絶ってしまった。それは、羅通に与する屠炉公主の働きによって北番が唐に対抗することを諦め、臣従を誓った後のことであった。女将の求婚によって唐軍が新たな戦力と共に敵方の恭順を得て大団円に決着したにも関わらず、屠炉公主という一人の女性に破滅的な最後を迎えたのである。これは「掃北」の個性ともいうべき部分であろう。こうした個性の存在は、「掃北」が目指した創作上の何かがあったとい

う証左である。次の項では、そうした「掃北」ならではの要素を検討し、家将小説の「物語素」とどのように関連して作品が成り立っているかについて考察したい。

#### 四 「掃北」が描こうとしたもの

「掃北」が目指した創作上の何か、つまり「掃北」が表現しようとしたものは何かということについて先に結論を述べておくと、それは「報復感情」である。

その結論を導き出す上で手がかりとなったのが「掃北」において「困城」の物語素が現れる前の部分、観文書屋本の第一回から第三回までで語られる、尉遲敬徳と息子宝林の父子団円の物語である。この物語は同類の情節が明雑劇に見え、『元曲選』および「脈望館鈔本」にそれぞれ《小尉遲将閼将認父帰朝》、《小尉遲将閼将鞭認父》と題するテキストがある。以下便宜上《小尉遲》とする。雑劇の情節を以下に述べる<sup>(19)</sup>。

劉武周の息子である劉季真是以前父の部下であったものの李世民に降った尉遲敬徳の当時3歳の息子を我が子として迎え、無敵と名付けて育てた。尉遲家に仕え敬徳の息子の養父として共に劉季真の元にいた宇文慶は、季真が唐に攻め込み成長した無敵を敬徳と戦わせようとしていることを知り、ついに無敵に真実を伝える。真の父が誰かを知った無敵は戦場で敬徳と出会

い、息子であることを打ち明け、証拠として本名である「尉遲宝林」の名の入った鞭を提示する。父に認められた劉無敵改め尉遲宝林は劉季真を生け捕りにして唐軍の陣営へ赴き、改めて父子団円する。

《小尉遲》と「掃北」における該当するエピソードとの大きな違いは、宝林に真実を明かすのが《小尉遲》では養父の宇文慶だったが「掃北」では劉將軍にさらわれ妻になることを迫られた宝林の母親梅夫人となったことである。梅夫人が真実を打ち明ける立場になったことで、尉遲父子の物語の何が増幅されたかが、「掃北」が表現しようとしたものに関わってくる。

《小尉遲》の主題の一つは父子団円であるが、その裏にもうひとつ「報冤仇」というテーマも潜んでいた。雑劇中では宇文慶が全てを知った尉遲宝林に対してその言葉を発する<sup>(20)</sup>。この場合の「冤仇」とは、宝林が敬徳の息子であることを隠し続け、実の父子を戦わせようとする劉季真に対する宇文慶の「恨み」であり、宝林の「恨み」ととらえられる。そして宝林は、季真を捉え「報冤仇」を果たす。雑劇で「恨み」が語られるのはその部分だけなのだが、「掃北」ではその質量が一気に拡大している。「掃北」第二回で、梅夫人は息子が戦った相手が生き別れた夫であり息子の父親だと知るところ罵る。

「母さんがお前のために20年耐え忍んだことを誰が知ろうか。今お前は成長したというのに、まさか父親を認めず、母親の仇

を討たず、却って仇に力を貸そうとは！」<sup>(21)</sup>

梅夫人にとって、劉国貞（雑劇における劉季真）は20年来の仇であり、息子にその恨みを雪いでほしいと願いつづけていた存在だった。梅夫人が宝林を身ごもっていた時に敬徳は投軍し、その留守の間に劉国貞が梅夫人を連れ去り我が物にしようとした。夫人はお腹の子を守るために屈辱に耐え忍び続けてきた。夫人は息子にむかって国貞への怨念を訴え、報復を願った。息子が国貞を捉えて母親の前に引きずり出すと、梅夫人は

「賊め、お前は私の節操も評判も誹り、みだりに妻と称して、北番の軍民たちに私が不義者だと誤認させ、貞節を失った女よと嘲笑させた。私がどれだけ怒りを抱えていたかわかるまい。全て私がこの子を身ごもっていて、夫の重い頼みに背けなかったため。見た目は穏やかにしても心の中には恨みを抱き、顔に傷をつけてお前を拒んだ。無事にこの子が成長し、実の夫の敵となることもなく父子団円して、私の願いも叶った。賊め、おまえが16年私の名節を辱めたこの恨みは如何ともし難い。」続けざまに叫んだ。「息子よ、とつとこの奸賊を肉みそに切り刻んでおしまい！」<sup>(22)</sup>

雑劇と比べ、恨みと復讐の念が強く描写されている。尉遲父子団円の情節は、尉遲家の劉国貞に対する恨みと報復の部分を増幅して「掃北」に組み込まれたのだ。

そして、尉遲家の一つの大きな報復の感情が満たされた後で起

こったのが、皇帝の「困城」である。「困城」が起こったことで連鎖的に「救援」が求められ、それに応えて羅通が出陣することになった。そしてここで、羅家もまた大きな報復の感情を抱いていた家であることが判明する。「掃北」第七回において、羅通は母の言いつけを聞かず元帥位を争う比武に出かけ、帰宅して初めて母から父祖の死が穏やかならぬものであったことを聞かされる。以来羅通は、皇帝を救出しようとする傍らひたすら怨敵を抹殺することを求め、行動するのである。

唐太宗が北伐に出ることで尉遲家の報復が果たされ、唐太宗が城に閉じ込められる事件が起こって羅家の報復の感情があらわになった。「掃北」において「報復」が重要な意味を持つことは明らかである。そして羅通は救援に向かう最中、蘇定方こそが求めていた怨敵であると知り、その息子である蘇麟を強力な敵将である鉄勒銀牙にぶつけて敗戦させ、その責を負わせて処刑する。蘇麟の弟蘇鳳はそれを見て震え上がり、逃走する。その息子が後に西番哈密国の元帥蘇宝同となり、『三伝』において唐軍の強敵となる。「困城」が招いた羅通の救援に報復の感情がまわりついたことが、未来の禍根となったのである。

そしてこの「報復」の感情は「若武者に結婚を迫る敵方の女将」にも関わってくる。

そのキーとなるのが、羅通の弟で兄の後を追って都を出てきた羅仁の存在である。羅仁は羅通の実の弟ではなく、羅家の將軍の一人

#### 『羅通掃北』に見る英雄物語の「創作」

羅安の息子で登場時9歳、裴元慶の転生と言われ両柄銀錐を操り、寶夫人が二人目の子として迎え入れ我が子のように育てていた。兄を負かした番将鉄雷八宝に勝つ豪傑ぶりを見せるが、その後あつてなく屠炉公主の飛刀の前に幼い命を散らす。羅通は目の前で幼い弟が女将の操る飛刀によってみじん切りにされる様子を見てしまう。屠炉公主と羅通とがお互い認識しあうのは、その悲劇の後であった。羅通の目には屠炉公主は可愛い弟を切り刻んだにつつき仇にしか見えなくなった。しかし、そうとは知らない屠炉公主にとっては、羅通はこれまで生きてきて初めて見た南朝の美しい貴公子であって、一目で恋に落ちるには十分だった。そして屠炉公主は羅通に求婚するに至るのだが、羅通に受け入れられるはずがない。羅通の頭の中は公主に対する恨みしかなく、出てくる言葉は罵倒しかない。羅通が全く話を聞く状態ではないので、ついに公主は武器をつきつけながら結婚を承諾しなければ殺す、もし承諾すれば投降して閔所を献上しようと言い出す。

そこで羅通は少し冷静になり、今はこの女の言葉を了承しておき、皇帝を救い出した後で報復をしても遅くはあるまいと考えを巡らせる。結局、公主の求婚を受け入れる、即ち戦力獲得ということになっても、羅通は報復感情を手放さないのである。

そして、羅通は木陽城へたどり着く。そこで待っていたのは、羅通によって何の罪もない息子たちが害されたことを悟った蘇定方であった。彼は命の危機を感じると同時に、羅通への強い恨みを抱く。

そして、その恨みを晴らすべく、羅通に「殺四門」させるのである。

前項では、『後伝』において尉遲敬徳が救援にきた秦懷玉へ恨みを晴らすために「殺四門」させたことを述べた。しかし、その恨みと言えは二度こづかれたことにすぎず、尉遲敬徳が懷玉に対して「あの銀国公蘇定方のように殺四門させよう」と思いついた時も「わしは城の上であやつ（懷玉）の力が怯むのを見てから迎えに行つてやつてもやりすぎではあるまい。」と考へていた程度である。そしていざ四門を転戦する懷玉が危機に陥ると尉遲敬徳は肝をつぶし、急いで門を開けさせて懷玉を救うために突進した。それに比して蘇定方は、羅通に対して本気で殺意を抱き、「もしあやつを入城させれば、いつこの仇を雪ぐというのだ。それどころかわしの命さえ危うい。刀を借りて人を殺し、公の場で恨みを晴らして我が子の恨みを雪ぐに越したことはない！あの畜生めを四門転戦させてやろう。ましてや番将祖車輪は万夫不当、勇猛な手下は数知れず。あやつに四門転戦させれば、必ず殺されるだろう、なんと愉快なことではないか。」<sup>(24)</sup>と考へる。

ここまでで、「掃北」において困城―救援―若武者に結婚を迫る敵方の女将―殺四門と連鎖して現れた物語素がすべて登場人物たちの報復感情を描き出すことに利用されていることが確認された。では、その結末はどうなったであろうか。

羅通は四門を転戦している最中に祖車輪に遭遇し、絶体絶命の危機に陥る。その羅通を屠炉公主が救った。公主は羅通を討つふりを

して祖車輪を斬り殺す。同時に蘇定方の悪巧みが太宗の知るところとなり、蘇定方は捕らえられ、羅通は城内にようやく入ることができた。屠炉公主は康王に降伏を勧め、北番は抵抗をやめて唐に帰順する。敵方の女将という戦力の獲得が敵国の恭順を引き出し大団円をもたらした、と見える。しかし、前述したように屠炉公主はその後自死する。その原因となったのは、やはり報復の感情であつた。

羅通は皇帝を救い出した後で公主に報復するという決意を実行し、婚礼の夜に公主を痛烈に面罵したのである。この時公主にもつとも打撃を与えたのは、戦場で羅通と結婚を約し唐の軍馬を城内に招き入れたことを不忠不孝の行為とする羅通の言葉であつた。これは、「若武者に結婚を迫る敵方の女将」という物語素の負の部分を暴き出す言葉であると言つていい。そして彼女がこれほどまでに羅通に憎まれたのは、彼女が男性武將を上回る能力の持ち主であつたために、羅仁を苦もなく手にかけてしまったことに起因する。彼女に戦力がなかつたなら、彼女が北番を唐に帰順させられるだけの立場でなかつたなら、公主は羅通に憎まれることもなく、自らを死に追いやるほどの精神的打撃も受けずにすんだはずだつた。「若武者に結婚を迫る敵方の女将」という物語素そのものが、屠炉公主自身に悲劇をもたらしことになった。こうした展開が他に見えるのは『後伝』の樊梨花で、惚れ込んだ丁山を救おうとしたはずみで父と兄を殺害してしまい、丁山に拒絶されるのである。しかし樊梨花は死ぬことなく、三度丁山に拒絶されても、結局は結ばれる。このように、

共通する物語素を利用しながらも、「掃北」は他とは全く異なった展開を生み出し得ている。

この項で述べた「掃北」の成り立ちについてまとめる。

「掃北」には、まず尉遲敬徳父子の物語が入話的な役割で存在する。その内容は元雜劇と異なつて梅氏が登場し、梅氏の報復感情を描写することで尉遲家の報復の物語として読めるようになっていゝ。物語素「困城」が用いられることで報復の物語は一旦リセットされるも、「困城」に連鎖して現れる物語素「救援」によつて新たな報復の物語が語り出されることになる。その主役である羅通に、「若武者に結婚を迫る敵方の女将」がさらに別の報復感情を与える。羅通の仇である蘇定方は、「殺四門」を利用して羅通に報復を遂げようとする。それを救つたのは新しい戦力となつた女将屠炉公主であり、公主の存在はさらに敵国の帰順をもたすが、却つてそのために羅通の報復感情を強く受け止めることとなり、破滅する。

このようにして、「掃北」は家将物語の枠組みを巧みに用いながら強く激しい報復感情をその上に描き出した。それは「掃北」の持つ「創作性」だと見なされてよいものではないだろうか。

## 五 おわりに

報復に満ち満ちた羅通のその後の人生は、どういったものだったろうか。

屠炉公主という花嫁を拒絶し自死せしめたことで太宗の怒りを買った羅通は、今後の結婚が許されなくなるが、程咬金の働きで史大奈の醜い娘を娶ることを許可される。羅家の嫁となつた娘は意外にも端正な顔立ちとなり、邸の切り盛りも良くこなして、羅通とは仲睦まじい夫婦となつた。しかし、強い報復感情によつて一人の女性を自死に追い込んだ羅通には、因果応報とも言ふべき未来が待ち構えていた。

『三伝』において、薛丁山の征西に従軍した羅通は、界牌関の守将で、蛇矛を操る98歳の老将王不超と戦闘する。実は羅通は、屠炉公主からの求婚を仮に承諾した際、公主に自分を信用させるために「もしも公主を欺いたら、後日7、80歳の老人に殺される」という呪いを自身にかけていた。この時の呪いが実現し、羅通は王不超の矛に腹を切られ、内臓を露出しながら不超を倒した後に自らも命を落とした。

羅通が公主を裏切つた報いによつて死んだことは、報復の物語といえる「掃北」の主人公として相応しいように思える。そういった意味では、『後伝』に見える羅通の物語は首尾一貫したものであると言つていい。報復の物語を描く上で家将小説の「物語素」を巧みに利用していたことといい、「掃北」の持つ創作性は意識が明確で高い水準にあると評価できるのではないだろうか。

本論は、これまであまり評価されてこなかつた清代の家将小説を物語素とそれ以外に腑分けして、それらが家将小説として規定でき



る部分と、作品自体の個性を確立させている部分であることを提示し、作品の個性として何が表現されているかということについて検討を加えた。従来「模倣」や「焼き直し」に過ぎないと切り捨てられてきた部分を、そのジャンルを規定する要素として捉え直すことで、その作品そのものの姿が浮かび上がってくる考えたからである。結果、先行作品がなく、故事の演変研究という側面からさえもとこぼされがちだった「掃北」について、家将物語の枠組みの中に「報復感情」が表現されているという「創作性」を発見しえたのである。

このようにして、一つの作品をジャンルを規定する要素とそれ以外の要素に腑分けすれば、清代英雄伝奇小説と同じく軽視されがちであった清代の新興芸能や地方芸能の創作の様相についても検討が可能になるかもしれない。そうした検討を積み重ねてゆくことで、清代の英雄物語の発展と拡大の様相を明らかにすることが可能になるのではないだろうか。

#### 注

- (1) 小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書店、2001・1）第五章による。
- (2) 「薛家将物語の生成と発展―清宮廷演劇との関係を中心に」（埼玉大学大学院人文社会科学学院研究科博士後期課程学際系紀要『日本アジア研究』第14号所収、2017・3）
- (3) 上海三聯書店、2009・1
- (4) 『後伝』とセットになった場合『説唐前伝』とされることもある。

(5) 注(3)前掲書第五章p102「作者完全摹仿『説唐全傳』对其父輩の描写、所以、这些小英雄并没有自己的灵魂血肉，只是父輩的复制品。『羅通扫北』这部分艺术描写粗糙简单，没有创造性，因此，是不成功的。」

(6) 注(3)前掲書第五章p115-116「薛家将故事与杨家将、岳家将、呼家将一样是中国古代小说中的英雄家族故事，它们不但在中国古代小说史上影响很大，而且在中国民间文学上这些故事都具有很广泛的群众基础。这种家族式的英雄族谱故事有着较为固定的程式化的叙事模式。：薛家将等故事中的这种模式化倾向是古代小说作家对其作品中的形象进行塑造时，采用了比较一致的素材和写作手法，从而在小说史上出现了许多性格相似的人物形象。这些形象反映出了作者理想中的英雄人格。」

(7) 大塚秀高『楊家将演義』前後の歴史小説（岡崎由美・松浦智子編『楊家将演義読本』所収、勉誠出版、2015）

(8) 上海古籍出版社刊行

(9) 2019年8月29日に九州大学伊都キャンパスで行われた中国古典小説研究会2019年度大会において、『羅通掃北』の十四回版と十六回版（『説唐小英雄伝』について）と題してこの問題に関する発表を行った。

(10) 台北・古亭書屋刊行影印本（1975・5）および遼寧古籍出版社刊行排印本（1996・1）を参照した。

(11) 松浦智子『楊家将演義』について―『北宋志伝』と『楊家府演義』とその祖本―（注(7)前掲書所収）

(12) 注(11)前掲論文では嘉靖年間にはすでにこれに先立つ版本や旧本とも言うべきものが存在していたことが述べられている。

(13) 双方とも金陵富春堂刊本の影印が『古本戯曲叢刊』初集（上海商務印書館、1954）に収められる。

(14) 物語には懷徳の弟として懷亮という人物もいるが、彼もまた架空の人物である。

(15) 前掲注(11)論文

(16) 前掲注(2)大塚論文における「四門殺転」と同じものを指すが、中国語

において通用していると思われるこの語を用いた。

(17) 「今日趁此機會欲効当初銀國公蘇定方一樣，要他殺箇四門，…」

(18) このことに關しては松浦智子『楊家將演義』における比武招親について(『中国文学研究』第三十一期、早稲田大学中国文学会、2005年12月)に詳しい。

(19) 王学奇主編『元曲選校注』(河北教育出版社、1994)によった。

(20) 第一折【賺煞尾】：「則要你竭力報冤仇，在意的驅兵衆。你尽孝何妨尽忠，這虎將門中無犬蹤，端的是結束威風。…(力を尽くして恨みに報い、心して兵士らを驅るように。孝を尽くせば忠も尽くせるといふもの、虎將の家中に犬は生まれぬ、まことに装い威風堂々。…)」

(21) 「做娘的為了妳，有二十年冤屈之事，誰人知道。到今朝孩兒長大成入，不想當場認父，報母之仇，反与仇人出力。」

(22) 「賊子，妳謗訕我節操声名，蜜称为妻，使北番軍民誤認我不義，恥笑有失貞節，怎知我含忿難明，皆因身懷此子，不負親夫重託，所以外貌是和，中心懷恨，毀容阻撓，得幸此子長成，再不道親夫臨敵，父子團圓，我完節之願畢矣。賊阿，妳一十六年謗節之名，此恨難泄。」忙叫…我親兒，快將這奸賊砍為肉醬。」

(23) 「後伝」第三十九回：「本帥在城上看他力怯就出去接応，也不為過。」

(24) 「後伝」第十二回：「我若放他進城，此仇何時報雪。却不道連我性命不保。倒不如借刀殺人，把一個公報私仇，以雪我兒之恨罷。叫這畜生四門殺轉。況番將祖車輪万人莫敵，手下驍勇之輩不計其數。叫他四門殺轉，必遭其害，豈不快我之心。」